

鶏卵



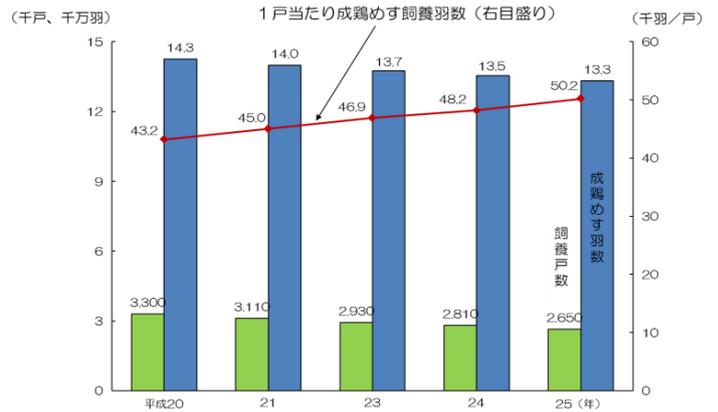
◆飼養動向

25年2月現在の採卵鶏の飼養羽数、前年同期比1.5%減

25年2月現在の採卵鶏の飼養戸数は、前年2月より160戸減少し、2,650戸(前年比5.7%減)となった。飼養規模別に見ると、1,000～4,999羽および10万羽以上の階層では前年並みとなったが、それ以外の階層では減少した。

また、成鶏めす飼養羽数は、1億3300万羽(同1.8%減)とわずかに減少した。飼養規模別に見ると、成鶏めす飼養羽数が10万羽以上の階層における同羽数の合計は増加した一方、10万羽未満の階層においては減少した。1戸当たりの平均成鶏めす飼養羽数は5万200羽(同4.1%増)とやや増加し、依然として大規模化が進んでいる(図1)。

図1 採卵鶏の飼養戸数、成鶏めす羽数



資料：農林水産省「畜産統計」、「家畜の飼養動向」

注1：数値は各年2月1日現在

2：成鶏めすとは種鶏を除く6カ月以上のめすをいう。

3：飼養戸数は、種鶏およびひな(6カ月未満)のみの飼養者および成鶏めす羽数1千羽未満の飼養者を除く。

4：平成22年は世界農業センサスの調査年のためデータなし。

◆生産

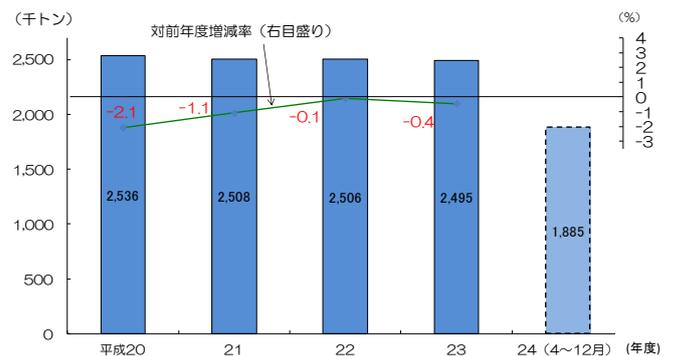
24年度の生産量、前年度比0.7%増

20年度の鶏卵生産量は、ひな餌付け羽数の減少などから、253万5700トン(前年度比2.1%減)とわずかに減少した。また、21年度も250万8500トン(同1.1%減)とわずかに減少したが、22年度は250万5800トンと、前年並みであった。

23年度は、23年1月から3月にかけて発生した高病原性鳥インフルエンザにより、約184万羽が処分対象となったことや、年度当初に、東日本大震災発生に伴う飼料不足に対応するため早期淘汰が行われたことなどが要因となり、249万4700トン(同0.4%減)とわずかに減少した。

24年度(4～12月)は、東日本大震災の影響からの回復などにより、188万5000トン(前年同期比0.7%増)とわずかに増加した(図2)。

図2 鶏卵の生産量



資料：農林水産省「鶏卵流通統計」

注：25年1月以降のデータは未公表

◆輸入

24年度の輸入量、前年度比10.9%減

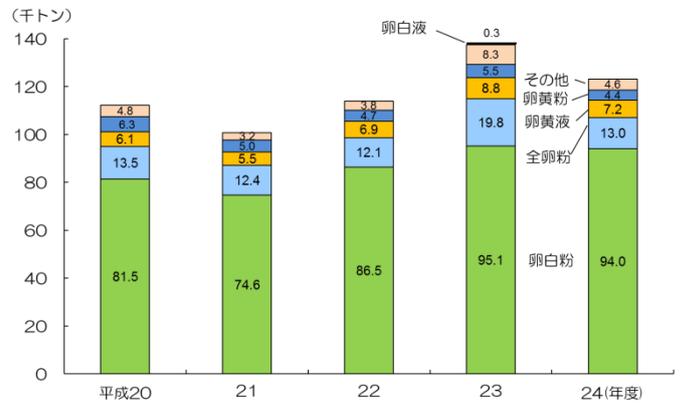
鶏卵の輸入量(殻付き換算ベース)は通常、国内需要量の3~5%程度を占めるが、国内の生産量、価格動向、為替相場などの影響を受けて変動する。

22年度は、卸売価格が前年より上昇し、輸入品に需要がシフトしたため、11万4000トン(前年度比13.1%増)と、かなり大きく増加した。

23年度は、東日本大震災後の国産品不足に対応するため、加工メーカーなどが輸入品による手当てを行ったことから、13万7800トン(同20.9%増)と、引き続き大幅に増加した。

24年度は、前年が高水準であったことから、12万3200トン(同10.9%減)と、かなりの程度減少したが、震災発生以降に定着した需要もあるとみられ、22年度の実績は上回った(図3)。なお、24年度の主な輸入相手国は、米国、オランダ、イタリアおよび中国であった。

図3 鶏卵の輸入量



資料：財務省「貿易統計」
注：殻付き換算ベース

◆消費

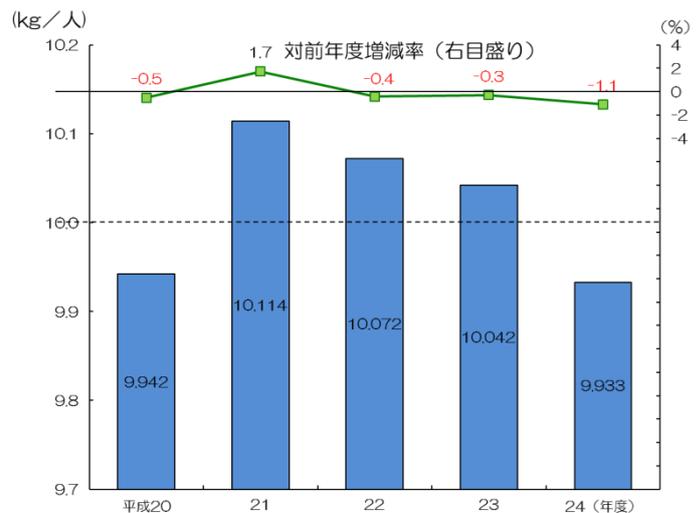
24年度の1人当たり家計消費量、前年度比1.1%減

21年度の家計消費量は、卵価が前年を下回ったことなどにより、1人当たり10.114キログラム(前年度比1.7%増)と、わずかに増加した。22年度は、卵価が上昇したため、10.072キログラム(同0.4%減)と、わずかに減少した。

23年度も、10.042キログラム(同0.3%減)と、わずかに減少したものの、3年連続で10キログラムを超える水準で推移した。

24年度においても減少傾向は継続し、9.933キログラム(同1.1%減)と、4年ぶりに10キログラムを下回る水準となった(図4)。

図4 鶏卵の家計消費量(1人当たり)



資料：総務省「家計調査報告」

◆卸売価格

24年度の卸売価格、前年度比3.7%安

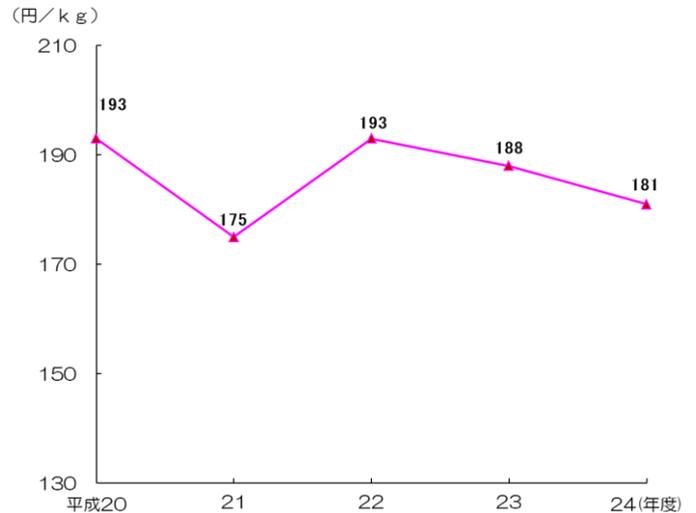
21年度の鶏卵卸売価格(東京全農系M)は、21年1月の価格の落ち込みが大きく、4月以降も前年並みの価格水準まで回復するほどの強い需要が見られなかったことから、キログラム当たり175円(前年度比9.3%安)と、かなりの程度低下した。

22年度は、前年の卸売価格低下を踏まえ、需要に応じた生産が行われたことなどから、前年をかなりの程度上回る同193円(同10.3%高)となった。

23年度は、前年度に発生した高病原性鳥インフルエンザや、東日本大震災発生直後の4、5月に、飼料不足に対応するため早期淘汰が行われた影響から、需給が逼迫し、卸売価格が大幅に上昇したが、その後は鶏卵の輸入量が大幅に増加したことにより需給が緩み、同188円(同2.6%安)と前年をわずかに下回った。

24年度は、年度後半になって、加工向けを中心とした需要の高まりにより上昇したものの、前年度に引き続いて低調に推移した年度前半の影響が大きく、1年を通して見ると、前年をやや下回る同181円(同3.7%安)となった(図5)。

図5 鶏卵の卸売価格(東京全農系M)



資料：JA全農たまご株式会社「月別一鶏卵相場」